また来てしまった。
飲み直しという体の押しかけ。
当の家主は、家に着くなり廊下のキッチンで、飲み物たちを睨んでいた。
この横顔も、ここだけのご褒美だ。
鋭い目は私に向くことなく、声音が気遣いをみせている。
「…浅島さん、どうする？」
「なら、ジンベースで…」
高月さんの見開かれた眼が私をとらえる。きれいな目で、呟くように問う。
「まじ？」
「だめ？」
「だめとは言わないけど」
刺すような間と目線。それでも心配—いや怒って…
「…わかった」
「…あっ、氷入れる器だけ、持ってくね」
扉で廊下と空間を断絶して、扉にもたれる。
さっきの高月さん、よかったな。緊張した撮りたかった。
いっそ—いや無理。
でも、これは、さっきの対応は。
「何もない、よね。今日だって」
私が彼ほど飲めないからで、ただ、優しいから…だと思ってる。
「浅島さん」
「はいっ」
声に扉を開く。色々と心臓に悪い。幸せだけど。
「パイン割り、飲める？」
「飲めるっ」
「じゃ、はい」
渡されたグラスを受け取って、リビングのテーブルで小さくグラスの縁を合わせる。
この時間は、比類なく幸せだ。
このままでもいいと思ってしまう。
この時間が、このひとが、大好きだ。